慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルクス社会学と原始社会論
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1930
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.24, No.7 (1930. 7) ,p.989(1)- 1048(60)
JaLC DOI	10.14991/001.19300701-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19300701-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

六月號

成人

日本成人教育協會發行

第五卷 第六號

定價 金廿五錢

講話
◎北海漁船擊沈事件……慶大教授 法學博士 板倉卓造
◎都鄙優劣論……慶大教授 奥井復太郎
◎決算諸表の見方……慶大教授 三邊金藏
◎戰後財政整理の一方法……慶應義塾 高等部教授 高木壽一
◎英國の勞働法……慶大教授 園乾治
◎親族相續法の話……慶大助教授 小池隆一
◎近世イギリス法制史……慶大助教授 峯岸治三
◎癌の遺傳について……慶大教授 醫學博士 川上漸

史談
◎古代希臘の文化……慶大教授 間崎万里

時事說明
◎減稅と豫算編成……理財學士 常松三郎

讀物
◎殺害された者に罪がある……茅野蕭々
◎俳諧の話……横山重

漫錄
◎西郊雜記……小澤愛圀
◎何が生物を進化させたか……宇都宮爽平
◎內省錄……西原和治
◎編輯室より

發賣所 大岡山書店 東京本市村町 麻布十區八 振替口座東京六四九五三番

三田學會雜誌 第二十四卷 第七號

マルクス社會學と原始社會論

加田哲二

一

「哲學者は世界をいろいろに解釋してきただけである。だが肝要なことは、世界を變更することである」とフォイエルバッハに關する論綱の最後にいつてゐるやうに、(註一)マルクスの立場は極めて實踐的であつた。彼は學問の爲めの學問といふやうな標語を振り翳して、象牙の塔にとぢこもらうとするものではない。人類解放の終極の原理を共產主義に求めて、この原理を實現するのが彼の目的であつた。(註二) 乍併、彼の立場は、理想主義者のそれではなかつた。彼はいふ。「共產主義

は吾々に對しては、作り出さねばならぬ一の狀態ではない。それは、現實がこれを標準としなければならぬ理想ではない。吾々は現在の狀態を止揚する現實的運動を共產主義といふのである。この運動の諸條件は現存の前提から生ずるのである」と。（註三）

註一　Marx, Thesen über Feuerbach. Engels, Feuerbach. (Marxistiche Bibliothek Bd. 3.) S. 76.

註二　Marx-Engels, Das kommunistische Mainfest.

註三　Marx-Engels, Deutsche Ideologie I. Marx-Engels Archiv. I. S. 252.

この「現在の狀態を止揚する現實的運動の諸條件は現存の前提から生ずる」のであるから、マルクスにとつては、現存の前提を研究することが最も必要なことであつた。而して、この「現存の前提」の研究は彼のあらゆる著作を通じて行はれたのであるが、筆者はその最も特色あるものとして、社會學的著作としては「ドイチッエ・イデオロギイ」を、經濟學的著作としては「資本論」を擧げる。資本論は「近世社會の經濟的運動律を明かにすることをその終局の目的とする」のである。（註四）即ち「資本論」の研究對象は近世的市民社會である。マルクスはこの市民的社會をそれ自體としてのみ理解したのではない。彼はいふ。

「市民的社會は生產の最も發展せる最も多樣なる歷史的組織體である。その諸關係を表現する諸範疇は、その編制の理解は、同時に市民的社會に向つて、既に沒落し去つたすべての社會諸形態の編制と生產關係とに對する洞察を與へる。市民的社會はそれら社會諸形態の廢墟と要素との上に築かれたものであつて、それら社會諸形態の一部分は未だ克服されざる遺物として、市民的社會のうちにその余命を保ち、一部分は嘗て單に暗示にすぎざりしものが、市民的社會において、完全なる意味にまで發展してゐる、等、等である。人間の解剖は猿の解剖に對する一つの鍵である。それに反し、低級なる種の動物におけるより、高級なるものへの暗示は、より高級なるものそれ自體が既に知悉された時にのみ、これを理解することができる。」（註五）

註四　資本論、第一卷第二版序文。

註五　Marx, Zur Kritik der politischen Oekonomie. S. XLI-XLII 宮川實譯本、（經濟學批判序說）四六—四七頁。

この觀方は所謂辨證法的觀方である。マルクスは、資本論第一卷に對するペテルスブルクの「キエストニーク・エウローブイ」誌の批判から、その方法論的部分を資本論第二版序文中に掲げて、この方法を説明してゐる。

「マルクスにとつては、研究の對象たる諸現象の法則を發見するといふ一點のみが重要であつた。而も彼れにとつて重要となつたのは、此等の現象が一の完成された形態を有し、且つ與へられたる歴史的期間の範圍内に見られる如き相互聯絡を保つ限りにおいて支配を受けるところの法則だけではない。更らに、此等の現象の變化、此等の現象の發達の法則、即ち一の形態から他の形態への、一組の相互聯絡關係から他の一組の相互聯絡關係への經過こそ、彼れにとつては、何よりも先づ第一に重要な問題なのである。彼れは、一度びこの法則を發見するや否や、それが社會的生活のうちに結果となつて現はれるところのものを仔細に研究する。……隨つてマルクスは、左の一事についてのみ努力することになる。それに即ち、嚴密なる科學的研究によつて、社會的事情の特定的秩序の必然性を論證し、出來得る限り公平に彼れの研究の起點たり、支持點たるべき事實を確定するといふことである。それには、現在における秩序の必然性と同時に、この秩序が不可避的に移り行くべき他の秩序の必然性をも論證すれば十分であつて、斯かる必然性を人類が信ずるか否か、意識してゐるか否かといふことは、敢て問ふ所でないのである。マルクスは社會的の運動を以つて、單に人類の意志、意識及び意向から獨立するといふのみでなく、寧ろ人類の欲求、意識及び意向を決定する所の法則によつて支配される自然史的の一行程なりとしてゐる。……意識的の要素が文化史上斯く從屬的の役目を演ずるに過ぎぬとすれば、文化それ自體を對象とする所の批判的研究においては、殊に意識の何等かの形態又は結果を研究の基礎とし得ざることは自明の事實である。即ちこの批判的研究の起點となり得るものは、觀念ではなく外部的の現象のみである。斯かる批判的研究の任務は一の事實を、觀念に對してでなく、他の事實に對して、比較對照することに限られるでらう。この研究にとつて重要なことは、甲乙二個の事實をば、出來得る限り嚴密に檢覈し、甲が乙に對して、事實上同一進化の相異つた要素となつてゐることを發見するにある。殊に最も重要なことは、各秩序の順序

を斯かる進化の各段階が依つて現れるところの前後の順序及び聯絡を、更らに、劣るところなく嚴密に究明するといふ一事である。然しながら、人或は言ふであらう。經濟生活上の普遍律なるものは、それが現在に應用されると過去に應用されるとを問はず、すべて同一のものであると。これこそ、マルクスが否認せんとするところのものである。マルクスに依れば、かゝる抽象的の法則は存在して居らぬのである。……彼れに依れば、寧ろ反對に、歷史的の各時代はそれ自身の法則を有してゐる。……人類の生活なるものは、一定の發達期を越えるや否や、即ち一の段階から他の段階に進み入るや、從來に於けると異つた法則によつて、支配され始める。……舊來の經濟學者が經濟上の法則をば、物理化學上の法則に擬したことは、これ取りも直さず、經濟法則の性質を全く誤解したものである。……現象をより深く分析することによつて、社會的の各有機體は――動植物有機體におけると同じく――根本的に相區別されるものであることが知られる。……しかのみならず、各有機體はその全構造を異にし、個々の器官も相一致することなく、斯かる器官の作用する條件も亦異つてゐる爲めに、同一の現象も全く相異つた法則の支配を受けるやうになるのである。」（註六）

註六　資本論、高畠素之譯、改造社版、第一冊一一三――一一四頁。

マルクスは、この一文について、「評者は彼れが、マルクスの眞の研究方法と呼ぶところのものを斯く劃切に、又斯く好意を以つて、描述したのであるが、そこに描述されたものは、そもそも辯證法的研究方法以外の何ものであつたか」といつてゐる。（註七）この辯證法的研究方法はマルクスのあらゆる著作において、これを見得るのであつて、彼の社會現象の取扱における最も特徴的のものであることはこゝに叙說するまでもない。然も既にいつたやうに、マルクスの研究は、主として、市民的社會――近世資本家的社會――を、その對象とした。乍併、彼の研究の意圖は必ずしも、市民的社會に限定されてゐた譯ではない。彼の社會理論の確立された「ドイチッエ・イデオロギイ」の如きは、一の論爭論文でもあるにも拘らず、人類社會全體を通じての辯證法的研究を目的としたことは、現存の形態においても、これを見ることが出來る。（註八）

註七　資本論、第一冊一一四頁。

註八　拙稿、マルクスと社會學――ドイチッエ・イデオロギイ」におけるマルクス社會學とその意義――拙著社會學概論改訂版、附錄第二。

だが、マルクスとエンゲルスとは「ドイチッエ・イデオロギイ」または「共産黨宣言」において懷いてゐた人類初期の社會狀態に關する見解を更らに、深化することなく、共産主義への現存前提を研究するに忙はしかつた。人類の原始的社會組織への彼等の注意を喚起せしめたものは「一八五〇年代であつたが、その注意を更らに呼び起したものは、ゲオルヒ・フォン・マウラアの獨乙村落共産體に關する研究であつた。（註九）　乍併、彼等を決定的に、この問題に關する研究に志ざさしめたものは、ルイス・モルガンの「古代社會」（一八七七年）であつた。「モルガンの研究の結果と彼れの――私はある限度内で吾々のといふことを許さるだらう――唯物的歴史研究の結果とを結びつけて叙述し、かくすることによつて、始めてその全意義を明かにしやうとしたものは、カアル・マルクスに外ならなかつた」。（註一〇）マルクスはその志を果さなかつた。エンゲルスは彼の遺志を繼いで「家族、私有財産及び國家の起源」（一八八四年）を書いた。これエンゲルスが「本書は一の遺言の執行とも言ふべきものである」といふ所以である。（註一一）

註九　拙稿、マルクス＝エンゲルスに於ける原始自生的共同體の認識、三田學會雜誌昭和五年二月號、三二頁以下。

註一〇　Engels, Urspring der Familie, des Privateigenthums und des Staates. Vorwärts. ausgabe 1922. S. VII.

註一一　Engels, op. cit., S. VII.

二

原始人類社會の研究は、マルクス――エンゲルスに對して、如何なる意義を有してゐたか。マルクス――エンゲルスが、社會學者として、社會組織を研究するとき、殊に、彼等の如く前述の辯證法的研究法を採用するものが、社會組織をその運動の流れにおいて見んとするとき、その認識が原始社會組織にまで到達することは甚だ自然のことでなければならぬ。よし、彼等が共産主義者でなかつたと假定しても、かゝる研究の道程に到達することは、その思索の聯絡上甚だ當然のことといはなければならぬ。然るに、彼等が共産主義者なるが故に、人類原始社會の認識に缺くるところありと主張するものがある。筆者はその代表的なるものとして、マサリックとゾムバアトとを擧げる。

ゾムバアトはマルクス―エンゲルスの原始社會に關する主張をもつて、一の神話に過ぎないといふ。彼はすべての社會主義的思想において、「過去において失はれ、將來において再び建設せらるべき樂園」に對する神話を發見する。この神話は宗教的神話として希臘、ヘブライ民族、基督教などによつて、信じられてゐるのであるが、社會主義思想はこの神話によつて影響せらるゝことが大である。例へば、紀元前第八世紀のギリシャの詩人ヘシオッドは當時における貧富の對立を嘆じ、有産者の横暴は既に、第一の黄金時代も、第二、第三、第四の黄金時代も過去の事實と化せしめたことを悲しみ、當時をもつて困難にして不幸なる鐵の時代だと謳つてゐる。（註一二）而して、その最も大なる影響を與へたものは基督教における千年王國の信仰である。ヨハネ默示錄にいふ。「我また一人の御使の底なき所の鍵と大なる鎖とを手に持ちて、天より降るを見たり。彼は龍、すなはち惡魔たりサタンたる古き蛇を捕へて、之を千年のあひだ繫ぎ置き、底なき所に投げ入れ閉ぢ込めて、その上に封印し、千年の終るまでは諸國の民を惑すことなからしむ。その後、暫時のあひだ解き放さるべし。我また多くの座位を見しに、之に座する者あり、審判する權威を與へられたり。我またイエスの證および神の御言のために馘られし者の靈魂、また獸をもその像をも拜せず己が額あるひは手にその徽章を受けざりし者どもを見たり。彼れは生きかへりて、千年の間キリストと共に王となれり。これは第一の復活なり。幸福なるかな、聖なるかな、第一の復活に干る人。この人々に對して第二の死は權威を持たず、彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年のあいだ王たるべし。」（註一三）かくの如き過去及び將來の樂園に對する信仰が少くとも、近世初期にいたるまでの社會主義的運動または思想の背景をなし來つたとするのである。而して、近代社會主義もまたかくの如き信仰を有してゐた。然るに近代社會主義の神話は、舊時の神話が宗教的であつたのに對して、自然主義的である。過去の樂園は今や、自然化されて、人類の原始狀態と同一視せられるに至つたのである。神によつて、神と同じ身體に作られた人間ではなく、動物から進化して來た人間と見らるゝに至つた。この傾向は既に近世社會主義の鼻祖といはれるサア・トマス・モアのユウトピヤにも現はれてゐる。彼はアメリゴ・ヴェスプッチのアメリカ蠻民の原始的生活狀態に關する報告に依つて影響されてゐる。

（註一四）吾々はこの外人類の原始狀態に言及した社會主義者として、モーレエ、ヴイトリングなどを擧げることが出來る。マルクス―エンゲルスについていへば、彼等の主張はマウラア及びモルガンの研究に基いてゐるのであるが、それが――殊にその氏族制度に關する主張――一の樂園的神話の自然科學化たる點において は何等の差異を見ないのである。（註一五）

註一二　Hesiod, Hauslehren oder Werke und Tage. Vers. 174-201. Beer. allgemeine Geschichte des Sozialismus. I. 32-33.

註一三　新約聖書　ヨハネ默示錄第二十章。

註一四　拙著近世社會學成立史、七七頁以下。

註一五　Werner Sombart, Der proletarische Sozialismus (Marxismus) Bd. I. Ss. 317-320.

マサリックもまたこれと同じ意味のことをいつてゐる。だがゾムバアトの思想史的見解に對して、マサリックは、原始社會の實際狀態からの立論であることを主張する。彼は次のやうにいふ。

「要するに、エンゲルスが叙述したやうな程度においては、性的共產主義は決して存在しなかつた。それ故に、またエンゲルスが描いたやうな經濟的共產主義も存在しなかつた。……一言をもつていへば、エンゲルスは、彼の未來理想を過去に置いたのである。過去のウトピズムス。……

このエンゲルスの母權的樂園のウトピズムスは明かである。原始的發展の個々について許りでなく、その全意義が誤まられてゐる。エンゲルスの叙述は、全く、黃金時代に關するルッソウの見解、並に初期文明人の墮落に關する廣く傳へられる見解の繰返しに過ぎない。たゞエンゲルスに從へば、林檎を摘みとつたのは、エヴァではなくして、アダムであり、且つ一の他の動機からであつた。――このアダムの關するところは、善惡の認識ではなくして、單に林檎そのものであつた。――彼もまた史的唯物論の支持者であつた。

所謂原始共產主義は、エンゲルスの考へてゐたものとは、似てもつかぬものであつた。それは消極的共產主義であつた。物質的並に精神的窮乏から起る共產主義であつた。原始人は、所有すること極めて少きか、殆んど皆無である。故に、吾々は、本來共產主義といふことが出來ないといつてよい。平等もまた消極的であり、自由もその通りである。人間は未だ財產なく、個性がなかつたのである」。

（註一六）

註一六　Th. G. Masaryk, Die philosophischen und soziologischen Grundlagen des Marxismus. 1899 Ss. 344-348.

このゾムバアト並にマサリュックの說は正當であるか。筆者はそれが一の偏見であることを主張する。筆者は素より原始社會の認識に關するエンゲルス說の絕對眞理であることを主張するものではない。乍併、個々における不充分な研究を抽出し來つて、その主張者が共產主義者なるが故に、全然荒唐無稽の說を懷くが如くいふのは、甚だ非學問的といはざるを得ない。ゾムバアト、マサリュックの主張するところはマルクス、エンゲルスが共產主義者なるが故に、彼等の未來社會の理想を過去の、殊に原始社會の狀態を調査することによつて、自己の未來社會觀を有利に導かんとしたといふ點にある。

筆者は、かゝることを主張する點に、ゾムバアト並にマサリュックのマルクス批判家としての缺點が存することを斷定する。更らに極言すれば、彼等に共產主義を憎惡するの余り、その理論、殊に社會發展の歷史的出發點である原始社會に關する見解を一の神話、信仰である主張するのである。それは、近時のマルクス批判家または反對者がマルクシズムをもつて一の信仰とすることによつて、片附けんとするのと、同工異曲に出づるものである。何故に然かいふか。筆者の理由はマルクス、エンゲルスの思想的發展の內にその根據を有する。

三

マルクス、エンゲルスが共產主義者に轉向したのは、一八四〇年代の初めであつた。彼等はその唯物史觀の確立（一八四五年）せらるゝ以前に既に共產主義者であつた。この事實は既に幾多のマルクス研究家によつて、またゾムバアト、マサリュックによつてさへも認められてゐる（註一七）。もしさうならば、マルクス、エンゲルスは、その共產主義者としての最初から、原始社會のユウトピヤを描いてゐなければならぬ。何となれば、彼等の所謂過去におけるユウトピヤはギリシャ二千年の昔から、而して、マルクス、エンゲルス當時の思想界を可成に影響してゐるルソッウなどによつて主張されてゐ、且つ彼等はこれを知つてゐたからである。

註一七　Sombart. op. cit., I. Bd. S. 31. ff. Masaryk. op. cit., S. 32. ff.

マルクス、エンゲルスはその共產主義理論家としての初期において、明確な原始

社會觀を持つてゐなかつた。このことは「共産黨宣言」の冒頭に「從來のすべての社會の歴史は階級鬪爭の歴史である」（註一八）といふ一句によつて知らるゝのである。この場合彼等は何等過去におけるユウトピヤについて語るところがない。エンゲルスは、この有名な一句に對して、後に至つて、屢〻引用せらるゝ次の如き脚註をこれに施した。曰く、「一八四七年には、すべての書かれた歴史に先行した社會の前史、社會組織は尙ほよく知られてゐなかつた。そのとき以來、ハックスタウゼンは、ロシヤにおける土地共有財産を發見し、マウラアは、それをもつてすべての獨逸の種族が歴史的に出發した社會的基礎として證明した。かくて徐々に人々は共同土地所有を有する村落共同體がインドからアイルランドにいたるまでの社會の原始形態であつたことを發見した。最後にこの自然のまゝの共産主義的社會の內部組織は、その代表的形態において、氏族の眞の性質並に種族におけるその地に關するモルガンの榮譽ある發見によつて、明かにされたのである。この原始的共同體の解體をもつて、社會の特殊なる、而して最後には相對立する階級への分離は始まつたのである」。（註一九）この一文をもつて見ても、原始社會の狀態とマルクス、エンゲルスの共産主義とは內的必然性によつて結ばれてゐるのでないことは明かであらう。即ち彼等の共産主義は過去の原始的社會における共産主義によつて基礎づけられてゐるのではない。勿論彼等はこの原始的無階級社會の存在の認識によつて、彼等の主張を深化することは出來たかも知れぬ。乍併、この事實の有無は彼等の共産主義理論と何等の係はりはないのである。從つて、彼等の共産主義と原始社會に關する見解とを結びつけ、これをもつて、共産主義に對する過去の神話となすが如きは、明かに、見當違ひの甚だしいものといはねばならぬ。

註一八　Marx-Engels, Das kommunistische Manifest. Kautskys Ausgabe. 1922. S. 25.

註一九　Kommunistisches Manifest. S. 25-26.

尙ほ、マルクス、エンゲルスの原始社會觀の發展は、このことを間接に證明するものである。

マルクス、エンゲルスの原始社會觀はエンゲルスの著作「家族、私有財産及び國家の起源」においてその定型が形成されたといつていゝ。乍併、彼等の原始社會觀がこれ以前に存在しなかつたのではない。モルガンの著述が發表せらるゝ以前に

おいても、マルクスはその古代社會、即ち家族に關する見解を持つてゐた。たゞモルガンの著作の刊行はこれに對して、決定的形態を與へたのである。然らば、マルクスにいたるまでの原始社會觀は如何なるものであつたか。近世初期の社會思想を概觀すると、その多くは、社會生活の始源を孤立人に求め、この孤立人が後に結合して、一定の共同生活の規定を定めることによつて、社會生活を開始したと考へた。社會契約說がこれである。然るに、社會學的思想の發展は孤立人の假定を前提とする自然法學說を克服し、實證的傾向の社會觀を樹立し來つた。この學說によると、社會生活の始源は、孤立人ではなくして、家族の擴張並にその分岐に求めたのである。個々の家族は徐々に先づ血族團體に、次いで、種族に、遂には民族に發展し、政治機關の發生とともに、政治的社會または國家たるに至る。この說は父權の支配する個別的家族を原始的家族とし、この家族の擴張である父權的大家族即ち家族的種族において、社會並に國家の眞の原始的形態を見出したのである。（註二〇）

（註二〇）拙著、近世社會學成立史、第三章。

マルクス―エンゲルスの社會觀の出發點となつたヘエゲルは、以上の如き意味においての家族からの社會の發達に關する說を採り入れてゐる。ヘエゲルは家族において、既に小規模においてではあるが、國家の特徵とするところのものを見た。家族においては、個人は孤立人ではなくして、彼の上に位する全體の一員である。何となれば、家族は性的本能の充足並に子供の養育を目的とするのみでなく、家族の意義は遠く、性的關係以上に出てゐるからである。家族は一の法的道德的人格的統一體であるのみでなく、同時に、一定の財產所有（家產）を有する經濟的共同體である。

家族はその發展過程において、一の新らしい萠芽を置いた。而して、この萠芽は家族から分れて獨立するのである。かくの如くして多數の家族が成立し、この多數の結合が種族及び民族を形成する。この過程と共に、個別的家族は、自ら分岐する。家族の自然的欲望は增加し、その成員は獨立するに至る。かくてこれらの成員はその欲望を充足するために、家族結合から離れて、他の家族の成員と相互關係を結ぶに至る。この關係において彼は、高度の團體的統一體に結合せらるゝのである。こゝに社會は成立する。何となれば、すべての社會の最も重要なる內容は、

多くの個人的欲望を媒介し、相互の勞働によつてこれを充足することにあるからである。家族の擴張並に分岐によつて、一方においては種族並に民族が成立すると共に、他方においては、欲望充足の結合の結果として市民的社會は成立するのである。（註二二）

註二一　Hegels, Philosophie des Rechtes. Lasson Ausgabe § 181.

カアル・マルクスはその青年時代において、家族についてヘエゲルと同じ見方をしてゐた。その一例として吾々は「ドイチッエ・イデオロギイ」を擧げることが出來る。彼はこゝで家族をもつて初期社會における唯一の社會關係としてゐる。（註二二）マルクスは、原始的家族をもつて、父權的個別的家族と見、この家族の增加並に分裂から種族及び民族は發展したものと見た。故に、彼は種族を家族の血族的擴張と見た。この見解は彼の「資本論」においても見ることが出來る。曰く、「先づ一家族、更らに進んでは一種族の內部に男女及び年齡の差異に基くところの、換言すれば、純生理上の基礎に立つ所の原生的分業が生じて來る。此分業の材料は共同體が擴大されて、其人々が增殖するに從ひ、特に異種族間の衝突から延いて、一種族による他種族の征服が行はれるにつれて、ます〳〵增大するものである。……蓋し、文化の初期においては、私個人ではなく、各家族、各種族等が夫々個別的に相對立するからである」。（註二三）

「經濟學批判」に對する「序說」においても、同じやうな見方を發見する。曰く「吾々が歷史を遡れば遡る程、個人、從つて生產を行つてゐる個人が獨立的でなくして、一の大な全體、始めは、全然自然的に家族及び種族に擴大せられた家族に從屬し、後には、種族の對立並に融合から發生し來つた種々な形態における共同體に從屬してゐる。」この「經濟學批判序說」は勿論一八五九年以前に執筆せられたものであり、前揭資本論中の一句はその初版（一八六七年）並に第二版（一八七三年）に至るまでマルクスによつて支持せられた意見であつたが、同書の第三版（一八八三年）においてはエンゲルスによつて次のやうな補註が加へられるに至つてゐるのである。曰く「著者は後に至り、人類の原始狀態について試みた極めて根本的な研究によつて左の結論に達した。即ち本來家族が種族に發達したのではなく、寧ろ反對に種族の方が血緣を基礎とする人類社會の本源的形態となつたものであつて、種族結合の解

體し始めたとき、茲に漸く種々雜多な家族形態が發展し來つたのである。」（註二四）かくの如く後年に至つて、マルクス―エンゲルスは始めマルクスの懷いてゐた考へとは反對の結論に到達した。

註二二　Marx-Engels Archiv. I. Bd. S. 246.

註二三　資本論、改造社版、第一册三三二頁。

註二四　資本論、同上、三三三頁。

マルクスの家族觀はヘエゲルを繼承して、こゝに止まつたのではない。マルクスは父權的家族が既に早く家長的家族に推移し、この家族が種々な發展形態を經過した點を認めたことによつて、ヘエゲル以上に出でゝゐる。ヘエゲルは單に、聖書に記述せられた猶太的家長的家族及び羅馬の古家族とを認め、これらの家族もまた原始家族の單純なる擴張に過ぎない家族形態として見たのである。而して、ヘエゲルは家族をもつて、史的發展の產物なりとする見解に對しては何等貢獻するところがない。然るにマルクスにあつては、古代愛蘭土並に印度の經濟狀態の研究に際して、こゝに行はれた家族共同體に逢着し、この中に直ちに、過去における家族發達の系列的形態を見たのである。マルクスは經濟の發展過程に消解し來つた、種々な經濟形態に適應する種々な歷史的家族形態を認識した。故にマルクスにとつては、現在の資本主義的社會における家族は何等自然的のものではなくして、他の家族形態がこれに先行し、また何時かは他の形態がこれに次ぐべき一の發展の產物なのである。故に「資本論」第一卷に曰く、

「資本制度の內部に行はれる舊來の家族制度の分解は如何に恐しく厭なものであらうとも、大工業なるものは、それが家庭の範圍外にある社會的に組織された生產行程の內部において、婦人や青年男女や幼童などに割り當てる極めて重大な役割をもつて、家族及び男女關係のヨリ高級な一形態の依つて立つべき新たなる經濟的基礎を造り出すのである。キリスト教的チュートン的家族形態を絕對視するは、古ローマ的、古ギリシャ的、又は東洋的家族形態――此等の家族形態は又相互に一つの歷史的發展系列を成すものであるが――を絕對視すると同じく迂愚な沙汰であるは言ふ迄もない。」（註二五）

註二五　資本論、同上、四七六頁。

原始社會の構成については、マルクスはヘエゲルと同じやうに考へた。即ち個

別的家族及びこれから發達した家族共同體の內部において、漸く分勞が增加し、欲望が增進したかくてこれらの團體はその生產物を相互に交換し始め、相互に經濟關係を結ぶに至り、これが一般化するのである。たゞヘエゲルとマルクスと異るところは、ヘエゲルの交換が元來個人によつて行はれ、從つて相互關係を個人的種類のものと見たのに反して、マルクスは最初から種々なる家族並に家族の團體そのものが相互に接觸するに至つたと說いた點であり、この點においてマルクスは正鵠を得てゐたのである。

以上がマルクスの家族に關する學說であつた。マルクスは少くとも一八七八年または一八七九年までこの考へを持つてゐたのである。然るにマルクスはこの年にモルガンの著述「古代社會」を繙讀するに及んで彼の家族觀に一の革命を經驗した。（註二六）

（註二六　H. Cunow, Marxsche Geschichts, Gesellschafts-und Staatstheorie. II. Bd. Ss. 82–86.

かくの如き變遷を經て、マルクスは始めて、彼の原始社會觀を確立することが出來たのである。この方面からいつても、マサリック及びゾムバアトの主張は何等根據あるものといへないのである。

四

モルガンの著作に接したマルクスは、これを熱心に研究することによつて、自己の研究とモルガンの研究との綜合を試みんとした。このためにマルクスはモルガンの著述から幾多の拔萃を作り、これに注意、說明、批評を加へてゐた。マルクスの重り行く病は遂に彼をして、原始社會に關する著述をなすことを許さなかつた。而してこの任務は、エンゲルスに課せられるに至つたのである。（註二七）エンゲルスはこの遺業をモルガンの著作を基礎として遂行した。乍併、エンゲルスは、モルガンの評價過程において、モルガン以前の古代社會史家の所說を窺つた。即ちバッハオォフェンの「母權論」（一八六一年）コックレナンの「古代史研究」（一八八六年）ラボックの「文明の起源と人類の原始狀態」（一八七〇年）などがこれである。（註二八）これらの諸論者の中、エンゲルスの根據となつたものは、モルガンであつて、彼はモルガンについて次のやうにいつてゐる。

「乍併、モルガンは、四十年前マルクスによつて發見せられた唯物史觀をアメリカにおいて、彼の方法で新たに發見し、而して、彼によつて、野蠻と文明との比較に

おいて、その重要點は、マルクスにおけると同じ結果に到達した。……

吾々の書かれた歴史の前史的基礎の主要特徴を發見し、且つ復興し、そして、北米インド人の血族團體において、ギリシヤ、ロオマ及び獨逸最古史の今日にいたるまで解かれなかつた最も重要な謎を明かにする鍵を見出したのは、モルガンの偉大なる功績である。彼の著述は、一夜漬のものではない。四十年間も、彼はその材料と闘い、遂にこれを完全に克服した。故に、彼の著作は、また現代における少數の劃期的著作の一である」。（註二九）

註二七　Engels, Ursprung der Familie. S. VII.

註二八　Engels, op. cit., S. XI. ff. 拙稿エンゲルスの原始家族論、三田學會雜誌二十一卷第十二號一四——一七頁。

註二九　Engels. op. cit. S. VIII-IX.

而して、エンゲルスは、モルガンの著作の中心的課題であるその氏族制度論については、「文化民族の父權的氏族の前段階としての原始的母權的氏族の再發見は、原始史に對して、生物學に對するダアウインの進化論、經濟學に對するマルクスの余剰價値論と同樣の意義を有する」といつてゐる。（註三〇）かくの如き評價をモルガンに加へたエンゲルスは、その原始社會觀においては、彼れを出でることがなかつたのである。この間の消息についてクノオは次のやうにいつてゐる。「マルクス及びエンゲルスが後に至つて、ルイス・エッチ・モルガンのイロクオイ種族の聯盟に關する著述及び「古代社會」を知るに至つたときでさへ、彼等は、これらの著作から原始的共同體形態並に經濟形態を研究する機會を得なかつた。このことは實に不可解である。何となれば、共産主義者としての彼等には、正しく原始的經濟生活の種々な共産主義的特徴を學ぶことがその責任でなければならなかつたからである。けれども、かゝる保留は、當時における二人の老大家の廣汎な政治的活働を考へるとき理解せらるゝ。而して、當時にあつては、かくの如き研究に對しては、尙ほ徹底的な豫備研究が缺けてをり、且つ當該材料の研究に對しては、部分的に新語學の研究を必要としたであらうからである。」（註三一）乍併、エンゲルスは、そのすべてをモルガンから借り來つたのではない。例へば、ロオマ、ギリシヤ、ゲルマンの古代史に關する部分の如きは、モルガンの研究に對して、多く附加するところがあつた。（註三二）

註三〇　Engels, op. cit., S. XXI.

註三一　Heinrich Cunow. op. cit., Bd. II. Ss. 90-91.

註三二　Engels. op. cit., S. IX.

かくの如くして、モルガンの研究はエンゲルスの採用によつて、一の力強き援軍を得たのである。既に「イロクォイ種族の聯盟」(League of the HO-DE'-NO-SAU-NEE or Iroquois 1851)「血族組織と親族關係」(Systems of Consanguinity and affinity of the human Family. Washington 1869) の發表によつて、その見解を確立し、その「古代社會」(Ancient Society or Researches in the Lines of human Progress from Savagery through Barbarism to Civilisation 1877)によつてその說を大成し、更らに「アメリカ土人の家屋と家庭生活」(The House and House-life of the American aborigines 1881)等を發表したモルガンは、エンゲルスによつて、原始社會に關する社會主義的古典とせらるゝに至つたのである。(註三三)(註三四)

註三三　Alexander A. Goldenweiser, Anthropological Theories of political origins. A History of political Theories Recent Times. edited by Merriam and Barnes 1924. P. 435-436.

註三四　ルイス・ハンリイ・モルガン(Lewis Henry Morgan)は一八一八年十一月二十一日ニユウ・ヨオク洲のオオロラに生れ、一八八一年十二月十七日ロオチエスタアに死んだ。法律學を修め、後にニユウ・ヨオク洲の議員となり、一八六八年以來元老院議員となる。彼の著作は以上の如く主としてアメリカ、インド人の社會組織の研究に關するものである。彼はエンゲルスもいふやうに同種族の中に四十年の歲月を生活した人である。(Meyers Konversationslexikon. 14.)

社會主義者の一般に古典と推稱するモルガンの著作は、如何なる意義を有するか。ロオザ・ルクセンブルヒは極めて要領よく彼の社會學的貢獻を擧げてゐる。

モルガンの第一の貢獻は、彼が歷史以前の文化史の中に科學的秩序を設定したことである。即ち彼は人類文化史に一定の發展段階を與へると同時に、その發展の原動力を認識した點にあつた。エンゲルスが、モルガンをもつて「人類の前史に專門的知識をもつて、一定の順序を與へやうと試みた最初の人である」といふ所以である。(註三五)　而して、この發展階段を動かす原動力を生產に求めたことである。エンゲルスは、この點について、モルガンがマルクスとは獨立に、史的唯物論の見地に立つてゐたことを指摘してゐる。(註三六)(註三七)

註三五　Engels, Ursprung. S. I.

註三六　Engels. op. cit., S. VII.

註三七　Rosa Luxemburg, Einführung in die Nationalökonomie, 1925. Ss. 94-96.

第二は原始社會の家族關係に屬するものである。モルガンは、原始社會の最底度の家族形態から、現在の一夫一婦制の家族にいたるまでの家族形態の發展を科學的に基礎づけたことである。第三の貢獻は、彼が家族關係の發達史を基礎として、氏族制度について、餘蘊なき研究を示したことである。即ち從來斷片的にしか知られてゐなかつた氏族組織に關して、實證的並に歴史的研究を重ねて、その本質を明かにしたことである。第四は、氏族制度が文明期の始めまで存續してゐて現在の如き文明――即ち國家と私的所有權と男子の優越にその基礎を置いてゐる文明は、人類史上極めて短期間に渉るに過ぎず、而して、社會の發展は、當然野蠻、未開時代が文明時代に推移したやうに、文明時代もまたより高き社會形態に推移すべきことを論證したことである。この點において、モルガンは「科學的社會主義に對して、新たに有力な援助を與へたのである。」即ちマルクス及びエンゲルスが資本主義における内在的矛盾要素の發展によつて、必然的に共産主義社會への推移を論證したことに對して、モルガンは、原始社會における共産制の存在を論證して、これに有力な援助を與へたのである。（註三八）

註三八　Rosa Luxemburg, op. cit., Ss. 96-100.

五

モルガンはその主著の序文にその研究目的を明かにしてゐる。

「恐らく、先地質時代に起源を有する人類は、氷河時代に、そしてその開始期に遡つてすら、ヨオロッパに生存してゐたことは、今や明らかとなつてゐる。人類はそれと期を同うして、生存してゐた多くの動物類の死滅後も存續し、その行程においても、その進歩においても、共に顯著なる人類の幾分派において、發展の過程を通つて來た。……北半球における氷河時代の終末から現今にいたるまでの間に、十萬年乃至二十萬年が經過したと推定することは決して誇張ではない。……

かやうな知識は、野蠻人と未開人、未開人と文明人の關係に關して從來行はれてゐた見解を實質的に變更した。今や吾々は未開時代が文明時代に先行してゐたことが知られるやうに、人類のすべての部族を通じて、野蠻時代が未開時代

に先行してゐたことを、確信的な證據に基いて主張することが出來る。人類種族の歴史はその源泉において、その經驗において、また進歩において一つである。……

發明及び發見は人類進歩の經路に添ふて、系列的な關係に立ち、その繼起的な段階を記錄してゐる。他方社會的及び政治的諸制度は人類の永久的欲望と關聯することによつて、二三の本源的な思想胚種から發展して來たのである。これらのものも、亦進歩の同樣の記錄を受けてゐる。これらの制度や、發明や、發見は、上記の如き經驗の例證として、今日殘つてゐる主要な諸事實を體現し、且つ保有してゐる。これらを綜合し、比較するとき、それらは、人類起源の一元性や發展の同一段階における人類の欲望の類似や、同一な社會狀態における人心の作用の一樣性を示すのである。

野蠻時代の後期及び未開時代の全期を通じて、人類は一般に、氏族（ジェント）、大氏族（フラトリイ）、及び部族（トライブ）に組織されてゐた。これらの組織はすべての大陸における古代社會の全體に亘つて行はれてゐて、古代社會を組織し、結合せしめてゐた手段であつた。これらの組織の構成、有機的系列の分子としての諸關係及び氏族、大氏族、部族の諸成員の權利、特權、義務等及人類の心意における政府觀念の發達を例證するものである。人類の主要な諸制度は野蠻時代において生じ、未開時代において發展し、そして文明時代において成熟しつゝある。

同樣に家族もまた繼起的諸形態を通過して、今日まで存續してゐる血緣並に類緣の大制度を創造した。各制度がそれぞれ形成された時代の家族に存在してゐた關係を記錄するこれらの諸制度は家族が血緣的形態から、中間的諸形態を經て一夫一婦的形態に進みつゝあつた間における人類の經驗の教訓的な記錄を含んでゐる。

財產の觀念もまた類似の生長と發展を遂げ蓄積された生存資料の代表としての財產所有に對する熱望は野蠻時代における皆無から始まつて、今や文明種族の心意を支配するに至つた。

右に述べた四種の事實は、野蠻から文明にいたる人類進歩の道程に沿ふて、平行線上に進展するものであつて、本書における論述の主題を爲すものである。」

（註三九）

註三九　Morgan, Ancient Society, Kerr edition. p. V-VII. 本書は、嘗て、高島素之、村尾昇一兩氏によつて、邦譯された。筆者はこの邦譯を見ることが出來なかつたのは遺憾である。尙ほ本論執筆中新邦譯の一部が現れた。山本琴、佐々木巖譯モルガン著古代社會上卷がこれである。原著書の約前半の邦譯でその完成の早きを希望する。筆者は、大體この譯書によつて、原文を引用することにした。

この序文を一讀しても、直ちに、明瞭であるやうに、モルガンの根本主張は、社會現象及び社會制度における規律性の論證である。モルガンはこの主張を詳細に次のやうに述べてゐる。「人類のあらゆる主要な制度は、古代において、人類が抱いてゐた思想の二三の胚種から進化し來つたものである。これらの胚種はまづ野蠻時代においてその發達を開始し、未開時代を經て、醱酵し、さらに文明時代を通じてその發達を繼續したものである。これらの思想の胚種の進化は、腦髓そのものの本質的屬性を構成するところの自然の論理によつて導かれて來たものである。この原則は、如何なる經驗狀態のもとにおいても、また如何なる時代においても、頗ぶる規則正しくその機能を遂行するから、その結果は劃一的、組織的であつて、明らかに、その經路を辿ることが出來る。これらの結果だけでも、人類の起源が單一であつたことを立證すべき確實な證據を將來提供するであらう。諸種の制度、發明、發見などのうちに啓示される人類の精神史は、恐らく個々人によつて永續せられ、經驗を通じて發達した單一種族の歷史であらう。人類の心意と運命との上に、最も強い影響を與へた思想の本源的胚種のうちには、政治に關するもの、家族に關するもの、言語に關するもの、宗教に關するもの、財產に關するものなどが含まれてゐる。これらの胚種はいづれも、その明確な端緒を野蠻時代に發し、且つ論理的に發達したものであるが、現になほ進步しつゝあり、將來永久に進步を繼續すべき筈のものであるから、それには何ら終局的な完成があり得ないのである。」（註四〇）かゝる社會現象及び社會制度の規律性の認識がモルガン古代社會研究の特徵であり、且つそれは近世における社會學的方法に一致するものである。（註四一）　この點において、モルガンの研究が原始社會に向けられながら、屢々見らるゝが如き事實蒐集に終る斷片な認識でない所以である。而して、この規律性及び繼起性の認識は、前段引

用の末段に見らるゝが如き不斷の進歩の思想に到達したのである。彼が如何にこの思想に徹底してゐたかを示すために、吾々は彼の現代文明に對する見解を引用するであらう。

「文明期の開始以來、財産の增大は巨大なものであり、その形態は種々であり、その利用は廣大であり、その管理は、所有者の利益に適合してゐるので、それは、人民の側からいへば、一の支配し得ない權力によつてゐる。人の心は、それ自らの創造物の前に當惑してゐる。乍併、人智が財産に對する支配者に上り、財産所有者の義務と所有權の限定とともに、その保護する財産に對する國家の關係を規制するときが來るであらう。社會の利益は個人の利益に對して優越する。而して、兩者は正しく、調和する關係に置かれねばならぬ。進歩が過去の法則であつたやうに、將來の法則でなければならぬのならば、單なる財産のみを追究することは、人類窮極の運命ではない。文明が始まつてから經過した時間は、人類存在の過去の繼續期間の一斷片に過ぎない。而してまた來るべき時代の一斷片にしか過ぎない。社會の解體は、財産を唯一の目的としてゐる過程の終滅たる望みがある。何となれば、かくの如き過程は自己破壞の要素をその內に包含するからである。政治における民主主義、社會における同胞主義、權利と特權における平等、普通教育、これらのものは、經驗、理性及び知識が徐々に向ひつゝある社會の次のより高き計畫を豫示するものである。それは、舊時の氏族の自由、平等、博愛のより高き形態における復興であらう。」（註四二）

註四〇　Morgan, op. cit., pp. 59-60. 譯本九一頁。

註四一　拙著近世社會學成立史、三六頁以下。

註四二　Morgan. op. cit., pp. 561-562.

六

社會現象及び社會制度の規律性從つて繼起性を主張したモルガンは、その規律性及び繼起性のよつて起る根據又は原因を何に求めたか。「モルガンはマルクスによつて四十年前に發見せられた唯物史觀をその方法においてアメリカで新たに發見した」とエンゲルスはいつてゐる。（註四三）モルガンは唯物史觀を主張したのであるか。モルガンは疑ひもなく社會に對する發展的見方を有することは、前

段の引用が明かにこれを示してゐる。而して、この社會的發展における技術の意義を認識した點において、正に唯物史觀的立場にあるといつて差支ない。彼はいふ。

「人類がその階梯の最低部から出發して漸次進展し來たものであるといふ重要な事實は、繼次的に發明された彼等の生存上の諸技術によつて適切に明示されてゐる。この生存技術における熟練の上にこそ、人類が何故地球上において優越するに至つたかといふ全問題が依存してゐる。人類は實に食物の生産に對する絶對的の支配權を獲得したと云ひ得られる唯一の生物である。乍併、人類は最初から他の動物以上にこの支配權を有してゐた譯ではない。人類は生存の基礎を擴大することなしには、同一食物のない他の地域に發展して行つて、終に地球の全表面に繁殖することが出來なかつたらう。そして最後に食物の種類と分量とに對する絶對的の支配權を獲得することなしには、彼等は漸次その數を增して、人口稠密な諸民族を形成することが出來なかつたらう。從つて人類進歩の主要な諸時代は、生活資源の擴大と多かれ少なかれ、直接に符合してゐたものの如くである。」（註四四）

註四三　Engels, op. cit., S. VII.

註四四　Morgan, op. cit., p. 19. 譯本、二八頁。

かくの如き見地から、モルガンは、後に示すやうに、人類進歩の段階を區分してゐるのであるが、彼はまた人類の進歩率と技術の發明との關係を次の如く規定してゐる。「發明及び發見の出現と制度の發達とともに、人類の心意は必然的に成長し膨張する。かくて吾々は腦髓そのもの、殊に大腦部分が漸次擴大して行くのを認めるに至る。野蠻時代においては、この精神的發達が緩漫であつたことは余儀ないところであつた。蓋し極めて單純な發明でも、精神的努力を援けるものの皆無または殆んど無に近いものから、これを成し遂げることが極めて困難であり、且つかやうな粗雜な生活狀態のもとにあつては、利用すべき何等かの物質もしくは、力を自然界に發見することが困難であつたからである。……最初の諸發明及び最初の種々な社會組織は、これを成就するには疑ひもなく最も困難であつた。從つてそれからは極めて永い期間によつて互ひに隔てられてゐたのである。その最

も適當な説明は、家族の形態の繼次的發展に見出される。幾何級數的比率をもつて作用するこの進歩の法則は野蠻時代の長かつたことを充分に説明してゐる。……人類の進歩は、最初から最後まで嚴密にではなくとも、本質的に、幾何級數的な比率において行はれて來たのである。（註四五）

註四五　Morgan, op. cit., pp. 36-37. 譯本五四——五五頁。

この生活資料生産の技術は、社會生活の基礎を構成するものであるが、社會生活に對して重大な意義を有する財産の如きも、生産技術と深い關係を有する。「財産の發達は發明及び發見の進歩と相伴ふのである。」（註四六）而して財産は、政治的制度並に家族を制約すべき要素である。ギリシャの諸制度を改鑄して、政治的社會への道を拓きつゝあつたものは、財産であつた。（註四七）家族の形態もまた財産の影響を受けることが大である。單婚家族の如きは私有財産制の直接の産物であるといつていゝ。要するに「財産は社會の有機的機構を動かすほど有力になつて來たのである。」（註四八）而して、財産が生産技術によつて制約せられるとすれば、生産技術は社會の基礎を形成するといひ得るのである。

註四六　Morgan, op. cit., p. 535.

註四七　Morgan, op. cit., pp. 223-224. 譯本三四九頁。

註四八　Morgan, op. cit. pp. 398-399.

要するに、モルガンの「唯物史觀」は次の點に到達する。「人類の知識及び經驗に屬するすべての事實は、全體としての人類が、低位狀態から高位狀態へ着々進んで來たものであることを證明してゐる。野蠻人が彼等の生存を維持するために、工夫する諸技術は著しく恒久的なものである。これらの技術は他のより高度の技術にとつて代はられるまでは決して失はれるものではない。これらの技術の應用と、種々な社會組織を通じて獲られた經驗とによつて人類は發展の必然的な法則のもとに進展して來たのである。」（註四九）彼は大體において、生産技術の社會的制約性を認めながらも、尙ほその上部構造たるべき要素の作用をも、可成の程度までに重要視してゐる。

註四九　Morgan, op. cit., p. 58. 譯本八八頁。

七

以上がモルガンの根本的立場である。この立場に立つて、彼は人類史の段階別を主張し、この段階別に照應するところの社會的諸制度、即ち政治的制度、血緣及び家族制度、財產制度の繼起的諸形態を論じたのである。

モルガンは先づ人類史の段階を區分した。野蠻期（Period of Savagery）未開期（Period of Barbarism）文明期（Period of Civilization）の三つの段階である。而して、彼は野蠻期及び未開期については、これを更らに細別して、各々初期、中期、後期（The Older, the Middle, and the Later Period）とし、その各期における狀態を低位、中位、高位とした。而して、これらの「諸時代は各々特殊の文化を包含し、そして特殊的な生活樣式を代表するものである。」（註五〇）

註五〇　Morgan, op. cit, p. 39. 譯本三――一二頁。

先づ野蠻期である。

一、野蠻低位狀態　この狀態は、人類の幼少期をもつて始まり、魚類を生活資料とし、火を使用する知識の獲得をもつて終る。人類はこの時期にあつては、局限された原生地に生存し、生果物と胡桃とを常食とした。有節言語の使用の始りはこの期に屬する。

二、野蠻中位狀態　魚類を生活資料とし、火を使用する知識を獲得したときに始まり、弓矢の發明をもつて終る。人類はこの時期にその原生地から、地表の廣大な部分に擴がつて行つたのである。

三、野蠻高位狀態　弓矢の發明とともに始まり、製陶技術の發明とともに終る。

次に未開期である。

第一、未開低位狀態　製陶技術は野蠻狀態と未開狀態とを區別する最も決定的の標準である。製陶技術は、耐火用として木器の上に粘土を塗ることにその起源を求めることが出來る。野蠻時代においては、吾々は一定時期における進步過程を一般的にすべての民族にその地理的環境を考量に入れずに、論ずることが出來たのであるが、吾々は未開時代の創始とともに兩大陸の自然的資源の相異を認めなければならぬ階段に達した。

未開中位狀態　東半球においては動物の馴化と飼養、西半球においては、食用植物の栽培と灌漑とをもつて始まり、また建築用としてアドオブ煉瓦とを用ゐたの

がこの時期の始まりである。西半球においては、玉蜀黍、南瓜、甜瓜が栽培せられ、これらの植物が彼等の主食物となつた。彼等は防禦工事のある村を形成し木造家屋に住んでゐた。金屬は鐵を除いては、種々なるものが使用された。東半球においては、この時期は乳と肉とを供給する動物を飼養した時に始まつてゐる。植物の栽培はまだ知られてゐなかつたやうである。

未開上位狀態は鐵鑛の溶解をもつて始まつて文字の發明とそれが記錄のために利用された文明期に入る間の時期がこれである。この時期における生產の改善進歩は過去のすべての時代を綜合したよりも大である。ギリシヤの英雄が活動し、ロオマの建設せらるゝ少し以前のイタリヤ民族、タレトス時代の獨逸民族がこの時代に屬する。

文明期、文明の狀態は、聲音、守母の使用及び文字による記錄の作製に始まり、古代及び近代に分たれる。（註五一）

註五一　Morgan, op. cit., pp. 9-12. 譯本一一二——一一六頁。

この人類史の三期區分は生活資料一般の生產、技術によるものである。今、これらの技術による食物獲得の方法について見れば、食物獲得の主要形態は、主として、五種類に分つことが出來、その最初の二つの形態は野蠻時代に發生し、後の三つの形態は未開時代に發生した。それは次の如き獲得形態である。一、局限された原生地において果實及び草木根を常食とする生活、二、魚食生活、三、栽培した澱粉性食物による生活、四、獸肉及び獸乳による生活、五、田野耕作による無限の食料に基く生活がそれである。（註五二）

註五二　Morgan, op. cit., pp. 19-27. 譯本一一八——一四〇頁。

八

扨て人類は、以上の如き基礎の上に如何なる社會を形成したか。モルガンは社會の確然なる體系的組織として二つの類型を擧げてゐる。

「人類の經驗はたゞ二つの政府の類型を發達せしめたに過ぎない。これらは何れも、社會の確然たる體系的な組織である。第一の、そして最も古いものは、氏族、大氏族、部族を基礎とした社會組織（a social organisation）である。第二の、そして最も新らしいものは、領土及び財產を基礎とした政治組織（a political organisation）

であつた。第一の類型のもとに、氏族的社會が創造されたが、この社會においては政府は專ら氏族や部族に對する彼等の關係を通じて個人に關係する。これらの關係は純個人的のものであつた。第二の類型のもとに、政治的社會が設立されたのであるが、この社會においては、政治は領土――即ち町や、郡や、州など――に對する彼等の關係を通じて、個人に關係する。これらの關係は純領土的のものであつた。この二つの類型は根本的に相異するものであつて、一は古代社會に屬し、他は近代社會に屬するものである。（註五三）

註五三　Morgan, op. cit., p. 61. 譯本九二頁。

「社會の確然たる體系的組織」としては、この二種の組織形態を擧げて、「氏族は人類制度のうちで最も古く、且つ最も廣く行はれたものの一つである」とモルガンはいつてゐるのであるが、（註五四）この氏族組織よりは一層古く、一層太古的で、氏族組織の胚種的原則を包含するが如き、組織の存在を擧げてゐる。それは性を基礎とする社會的組織である。（註五五）この性を基礎とする社會組織は人類の初期からこれを見ることが出來る。野蠻時代にあつては、夫と妻との共同が社會制度の中心原理であつたことは、直ちに看取され得よう。而して、集團內に確立せられた婚姻の權利及び特權は一つの尨大な組織に發達し、やがて社會構成上の有機的原則となつた。かくてこの權利及び特權はその根據の深いものであつたから、これらの解放は無意識的な諸改革を齎らした運動によらざるを得なかつたのである。かくて、「性を基礎とする階級組織及びその後に起つたより高度の血族を基礎とする氏族組織は、自然陶汰によつて無意識的に行はれた大なる社會的運動の結果と看做されねばならぬ。」（註五六）

註五四　Morgan, op. cit., p. 61. 譯本九二頁。
註五五　Morgan, op. cit., p. 47. 譯本六九頁。
註五六　Morgan, op. cit., pp. 47-48. 譯本六九――七〇頁。

かゝる見地に立つて、モルガンは人類の性的組織の發展的、連繫の圖表を作成した。この連繫は一部は假定的であるが、その間には、密接にして、疑ふべからざる關係が存在し、血緣家族から單婚家族にいたる家族の發達を影響した主要なる社會的及び家內的關係を包含してゐるのである。その連繫は次の如きものである。

連繫の第一段階

一、無拘束性交

二、群における直系及び傍系の兄弟姉妹の雜婚

三、血緣家族（家族の第一段階）

四、血緣及び親族關係のマレエ的體系

連繫の第二段階

五、性の基礎における組織、兄弟姉妹の雜婚を抑制する傾向のあるプナルア習慣

六、プナルア家族（家族の第二段階）

七、氏族への組織、これは婚姻關係から兄弟姉妹を排除する。

八、血緣及び親族關係のヴァラニア及びジェノヴェニア的體系

連繫の第三段階

九、氏族組織の勢力の增加及び生活方法における改善、これは人類の一部をして、未開低位狀態に入らしめる。

一〇、一對間の婚姻、但し絕對的共棲なし

一一、シンディエスシア家族、即ち對偶家族（家族の第三段階）

連繫の第四段階

一二、限定された地域の平原における遊牧生活

一三、家長的家族（家族の第四の、但し、例外的なる段階）

連繫の第五段階

一四、財產の勃興及び財產に對する直系相續の決定

一五、單婚家族（家族の第五段階）

一六、血緣及親族のアリヤン、セミチック、及びスウレリヤン體系、テュレニア體系の崩壞を惹起しつゝある。（註五七）

註五七　Morgan, op. cit., pp. 505-506.

以上の性的連繫の中、家族の形態を抽出して見れば、次の五形態を得ることが出來る。

一、血緣家族

二、プナルア家族
三、シンディアスシア的又は對偶家族
四、家長的家族
五、單婚家族（註五八）

註五八　Morgan, op. cit., pp. 393-394

これらの家族の形態は、順次の發展的形態であつて、その個々が別々の無關係な形態ではない。而して、この五形態の中の三形態、即ち第一、第二、及び第五の形態は、基本的なものである。何となれば、それは現存の形態にある三つの區別ある血緣體系を創造するほど一般的であり、有力なるものだからである。また逆にこれらの體系は、それ自ら、密接な關係に立つ先行的家族及び婚姻形態の存在を證明するものである。他の二形態、即ち對偶家族と家長的家族は、中間的なものであつて、新たな血緣體系を創設し、または修正するほど、人類に大なる影響を及ぼしてゐない。（註五九）

註五九　Morgan, op. cit., p. 394

九

家族及び婚姻の諸形態を說明するためには、その各々に附隨する血緣及親族制度の實質的內容を示す必要がある。この血緣制度の內容は家族及婚姻形態の諸問題を暗示するのみならず、この體系からの推論は疑問の余地を發生せしめない位に確實である。乍併、この制度は極めて複雜のものであることはいふまでもない。家族形態と密接な關係を有する三つの血緣體系とは次の如きものをいふのである。一、マレエ式、二、テゥラニア式、三、アリヤン（又はセミチック、ウラリヤ）式と呼ばれるものである。

今日までに發見された血緣の最も原始的な體系はポリネシア種族の間におけるそれである。ハワイ式體系はその代表的なものである。モルガンはそれをマレエ式體系と名づけた。この體系においては、親疎すべての血緣は、次の關係の何れかに歸する。即ち父母、子、祖父母、孫、兄弟、姉妹がこれである。他の血緣關係は認められないのである。これらの外に婚姻關係がある。この血緣體系は、第一家族形態である血緣家族とともに起り、その古代的存在の主要な證據を包含してゐる。

この血制緣度によつて、かくの如き重要な推論を行ふことは、その根據の薄弱なことを指摘せらるゝかも知れぬ。乍併、これらの關係が眞實に存在したならば、この推論の眞實性は許容せられる。ポリネシアにおいては、家族形態は既に、血緣形態からプナルア形態に移つてゐるのであるが、この血緣形態が一般に行はれてゐる。この血緣體系の變更を必要とするほどの强い動機もまた基本的な社會制度の變革も存在しないからである。アメリカの基督教布教が始められた頃（一八二〇年頃）のサンドウッチ諸島においては、兄弟姉妹の雜婚はまだ全然その跡を斷つたのではなかつた。古代アジアにおけるその存在も疑ふことは出來ぬ。何となれば、今日アジアに行はれてゐるツウラニア體系の基礎だからである。（註六〇）

註六〇　Morgan, op. cit., pp. 394-396.

第二の大血緣體系はツウラニア式のそれである。ツウラニア式血緣體系はその起源を群におけるプナルア婚姻と氏族制度に歸することが出來る。この婚姻形態は、自己の兄弟姉妹を婚姻關係から排除する氏族における雜婚の禁止によつて成立したのである。從つて、血緣のツウラニア式形態が婚姻に表はれると、それはプナルア家族である。ツウラニア式體系の下においては、アリアン式體系の下に知られてゐるすべての關係を認め、別にアリアン式においては、注意されてゐない數種の關係を認めるのである。ツウラニア式に特有なるものは、親疎の血緣が種類別にせられて、アリアン式體系の普通の關係以上に及ぶのである。普通及び儀式の挨拶において、血緣の言葉で呼び掛け、決して、個人名を呼ぶことがないのである。このことは、最も疎遠な血緣關係をも保存認識せしめ、且つこの體系の知識を普及せしめる。何等の血緣關係のない場合においては、挨拶の形式は「余の友人」と簡單にいふのである。（註六一）

註六一　Morgan, op. cit., pp. 396-397.

第三の血緣體系はアリアン、セミチック又はニウラリアン式と呼ばるべきものである。これは、單婚家族における關係を規定する體系である。（註六二）

註六二　Morgan, op. cit., p. 398.

要するにこれらの血緣體系は、根本的に相異する二形態に歸着する。それは分類的體系（classificatory system.）と圖式的または記述的體系（descriptive system）が、これ

である。分類的體系の下においては、血緣はその一々が記載せらるゝことなく、種類に分類せらるゝ。この場合、自己に對する血緣の遠近の程度については、何等考慮せらるゝことなく、同一種類のすべての人に對して、同一の血緣名稱が用ゐられるのである。かくて、自分自身の兄弟及び自分の父の兄弟の息子はすべて同樣に自分の兄弟である。自分自身の姉妹及び自分の母の姉妹の娘はすべて一樣に自分の姉妹である。かくの如きが、マレエ式及びッウラニア式體系における分類法である。記述的體系における稱呼法は、血緣本來の名稱、またはその名稱の組み合せによるものであつて、各人の血緣關係を各人特殊のものとする。吾々は兄弟の息子、父の兄弟、父の兄弟の息子等と呼ぶのである。これはアリアン、セミチック、ウラリア家族の體系であつて、單婚家族とともに起つたものである。この二つの體系における基本的差異は、前者が群における複數婚姻を行ひ、後者が單數當事者における單婚の行はれるのによるのである。而して、記述的體系は、アリアン、セミチック、ウラリア家族において、同樣であるが、分類的體系には二つある。その一は、最も古いマレエ式であつて、その二は、ッウラニア及びジェニノヴァニア式で、マレエ式の修正によつて成るものである。（註六三）

註六三　Morgan, op. cit., pp. 403-404.

以上の血緣體系に基礎を有する五つの家族形態の中、第一の血緣家族を除いては、歷史時代に存在し、また存在するものである。たゞ血緣家族のみは、既にその痕跡を失ひ、以上の如き血緣體系より推論する外ないのである。（註六四）　乍併、これらの家族形態は、既に述べたやうに、一連の發展的形態であつて、何れも異れる社會狀態に照應して發展し來つたもので、吾々はこゝに、社會發展における最も典型的な現象を發見し得るのである。（註六五）

註六四　Morgan, op. cit., p. 398.
註六五　Morgan, op. cit., p. 400.

一〇

モルガンは、これらの家族の五形態以外の性的關係を考へたか。それは人類の野蠻低位狀態における性的關係である。モルガンはこの狀態を無拘束性交の狀態または亂婚（Promiscuous Intercourse or promiscuity）とした。これは、人類の最低狀態

であつて、人類がまだその周圍の動物と差したる相違を持たなかつた時代の狀態である。この時代の人類は婚姻を知らず、群團で生活してゐたらしい。人類は單に野蠻人であつた許りでなく、知識と道德的意識を有すること最も少なかつた。この狀態から人類の徐々たる發展は始まつたのである。（註六六）

註六六　Morgan, op. cit., p. 507. and. p. 427.

かくの如き性的關係の狀態が存在したか否かの證據が存するか否かは問題とせられてゐる。乍併、モルガンはこれに答へるのに、血緣家族並に血緣のマレエ式體系が、それに先行する無拘束性交狀態を豫定することをもつてした。それは、人類がその原生地において、草木根を常食としてゐた時代に限られてゐた。何となれば、人類が魚食生活を開始し、人工的食物に依賴して、地表の散布し始めてからは、この狀態は恐らくあり得ざるものであつたらう。この時代においては、血緣群內において雜婚が行はれ、その結果として、血緣家族の形成となつたのであらう。血緣體系からの推論によつて、考へ得る最古の社會形態はこの家族である。この血緣家族は、その先行的想像狀態の特徵を供へてゐる。それは限定された範圍內における無拘束性交を認めてゐた。この血緣家族と無拘束性交における群生活との間の期間は相當に長いものに相異ないのであるが、この間に中間的狀態のあつた證據も、その推論の根據も存在しない。乍併、この問題の解決は、實證的には存し得ない。たゞ無拘束性交は血緣家族に對して、先行する必然的狀態として理論的に推論する外ないのである。而して、この血緣家族と雖も、實證的知識の及ばざる人類の霧のやうに、茫漠なる太古の中に隱れてゐるのである。（註六七）

註六七　Morgan, op. cit., pp. 508–509.

モルガンは人類の性的關係をこの狀態から說明し始めて、その徐々たる發展の過程を迹つたのである。乍併、彼の目的――少くとも彼の「古代社會」における目的は、イロクオイ種族の中に發見せられた氏族制度について說明し、この氏族制度が人類最初の「確然たる社會制度」なることを主張し、且つ現存低度文化種族及び歷史的種族におけるこの制度の一般性を認識し、この社會制度の崩壞の廢墟にのみ、政治的社會――國家――が成立せらるゝことを發展的に說明するにあつたことは容易に見得るところである。

然るに、多くのモルガン批評家は、この重要な點に及ばずして、モルガンの推定的出發點である無拘束性交の狀態の存否に關する批判に重きを置くに至つた。この問題は既にモルガンもいつてゐるやうに、直接歸納的立證に役立つべき事實を求めることが出來ぬ。この點から見ても、議論の餘地は大いに、保留せられてゐるものと考へられるのである。而して、モルガンの推定的狀態たる無拘束的性交の狀態といふが如きは現在の道德的觀念から見れば排斥すべき、而して憎惡すべき狀態と考へられるのである。かゝる點から、このモルガンの主張に對して、多くの非難の集ることは當然のことでなくてはならぬ。宗教的並に道德的根據に基いた非難は別としても、尙ほ社會學者の間に斯說に對する贊否の論は甚だ盛であるといはねばならぬ。

モルガンの無拘束性交狀態存在說は必ずしも彼の創見ではない。彼以前においては、例へば、バッハオォフェン、マックレナン、ルボック等によつて主張せられ、彼の以後において、この說を支持するものとしては、リッペルト、ウィルケン、コオラア、ポスト、ベルンフェフト、ヘルクルト、スペンサア、ラッツェル、アヒリス、ランプレヒトなどを擧げることが出來る。これに反して、この說に反對して、人類婚姻の形態を單婚と斷定せんとする學者として、吾々は次の如き人々を擧げる。シュタルケ、ウエスタアマアク、グロッス、クロウリイ、アンドリュウ・ラング、アトキンスン、ノオスコオト・トマス、ウイルヘルム・ヴント、フォレル、クウレンベックがこれである。勿論近時の學者の間には、モルガン說の誤謬と眞理とを鑑別して、贊否兩說を折衷せんとするものもある。リイヴァアス、ライツェンシュタイン、ブュシャン、ハヴェロック、エリス、クノオ、ブレエザア、ヘエルンス、バルトランドの如きがこれである。（註六八）

註六八　Müller-Lyer, Phasen der Liebe. Ss. 118-120.

筆者はこの論爭をこゝに記述しやうとは思はない。それは新たな一論文を要求するに價する課題である。たゞ筆者のこの問題に對する態度を明かにすれば、それは無拘束性交狀態の存在說に傾いてゐる。この存在に對するモルガンの血緣稱呼法による推論の正否については、筆者は何ごともいふことが出來ない。けれども、低度文化種族の社會學的並に心理學的研究の成果は、この說の正當性を主張し得るが如くである。このことは、今日家族史研究の分野に行はれてゐる假說

の紛糾の解決といふ困難な課題を解決したと稱せらるゝミュラア・リヤァの權威によつていふことが出來ると思ふ。（註六九）　彼の「家族」における詳細な理論的基礎づけは、吾々の尊重し得る論斷である。（註七〇）

註六九　Cunow, Zur Urgeschichte der Ehe und Familie. 1912. 服部之總譯婚姻及び家族の原史について六四頁

註七〇　Müller Lyer, Die Familie. Ss. 11-37.

本文中にも既に記して置いたやうに、モルガンの「古代社會」の中心點は氏族制度論にある。故に本論は、マルクス社會學との關係におけるその根本的立場を略述したに過ぎない。拙稿「エンゲルスの原始家族論」（三田學會雜誌第二十一卷第十二號）は本論文と大なる關係がある。參照せられば幸甚である。本論文は、過去二三回本誌に擧げた拙稿とともに、マルクス國家社會學の解明をその目的としてゐるものであるからその限りにおいてあまり關係のない事項を省略して行つたつもりではあるが、現に見るが如き形態のものとなつた。これらの過去の諸論文との關聯において、本論文並に將來發表すべき諸論文を見られんことを筆者は切に希望する。

一九三〇・六・一三稿了

一八四二年前の炭礦勞働狀態

——英國兒童勞働史の一齣——

高村象平

一

吾人は本誌第二十四卷第四號に、一八四二年炭坑法制定前の英國炭礦業に於ける技術上の進歩を概說した。本稿は此の進歩の下に於て坑夫、殊に幼年坑夫が斯業の勞資關係から如何なる影響を受けたかの解明を目的とする。彼等の環境と其の感化も亦以下に於て檢討せんと欲する事項である。

此の理解を容易ならしむるが爲めに、吾人は先づ斯業の一般雇傭關係を一瞥するの要があることを認める。炭礦業は何人によつて營まれたか、坑夫は如何なる條件の下に雇傭され操業したかの知識は、幼年坑夫の勞働狀態を見るに際して、豫じめ保有されねばならぬものである。

英國に於ては、土地の所有權は亦其の土地内の鑛物——但し金銀を除く——の所有權を意味した。從て中世に於ても、領主は其の欲するがまゝに採炭し、又は之を他に賃貸したのである(1)。マナア借地人(manorial tenant)は荒蕪地及び森林地から自家用の石炭を採掘する權利を有してゐた(2)。